2023年3月 19 日 受難節第 4 主日礼拝

メッセージ「命に向き直る時」　　牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ 3章1－18節

三月も半ばを過ぎ、卒業式や卒園式の季節になりました。昨日は残念ながら雨でしたが、先週は気温も上がって、春の陽気を感じる日も増えてきました。晴れ着に身を包み、満面の笑みで保育園を卒園していく子どもたちを眺めていると、それだけでこちらまで嬉しくなります。それこそ「僅か数年前まで、生まれたばかりの赤ちゃんだった子が、こんなに大きくなったのか」というのが保護者の皆様や、携わって来られた先生方など、周りの方々の率直な思いなのではないかと想像します。多くの方々によって守られながら、小さな命がそれぞれに成長し、すくすくと大きくなっていくということ……。それは本当に人間の手の業を越えて、命の源である神様が共に働かれている奇跡の出来事なのだということを、示してくれているように思えてなりません。

さて、そんな人間の命の奇跡、命の不思議さを思わされる一方で、先日来、私が改めて考えさせられているのは、「人間らしさとは何か」ということです。と言いますのも、ウクライナの隣にあるルーマニアで、世界で初めてAI（人工知能）が政府の政策顧問に任命されたというニュースを聞いたからです。一瞬、何を言っているのか、よく分からなかったのですが、人口約 2000 万人の国で、SNSなどインターネット上に飛び交っている国民から発信された情報を AI が常に学習し、そこから「世論」を分析して、政府に報告する役目なのだそうです。確かに、現在では、全世界規模で考えた時、わずか数分間や数時間の間に、一人の人間が一生をかけても読み切れない程の文章や、視聴しきれない程の分量の映像が、発信され続けていますので、それらのような膨大な量の情報を収集して分析する作業には、人間よりもAIの方が適しています。人間には食事も休憩も睡眠も必要ですが、AIは電源さえつないでいれば、休みなく働き続けてくれるからです。とはいえ、何だか違和感を覚えなくもありません。

もちろん、まだまだ「鉄腕アトム」や「ドラえもん」には程遠いとは言え、ロボットやAI、コンピューターは、日進月歩のものすごい速度で進化し続けています。日本で初めてラジオ放送が始まったのは、今からおよそ 100 年前だそうですが、箱の中

から放送が聞こえてくるという新しい技術に驚いていた当時の人々は、まさか100 年後には掌に納まる携帯電話で、いつでも誰もが世界中の人々とテレビ電話を出来るようになるとは、思ってもみかなかったのではないでしょうか。機械やコンピューターの技術革新は、新しい生活用品とそれを使った生活様式を生み出しただけではなく、人間の働き方も変化させて来ました。かつて手作業でしていた物作りが、工場で機械を操作することによって大量生産されるようになり、さらにはコンピューターが機械を制御するようになると、その機械を操作する人間さえも不要になりました。最近では町の中で、運転手がハンドルを握っていない自動運転の車さえ、しばしば見かけるようになりましたし、近い将来、運転手のいないバスや電車、タクシーも当たり前になるかもしれません。鉄道の駅は自動改札が当たり前で有人改札はありませんし、スーパーマーケットやお店のレジすらも機械化・自動化が進みつつあります。機械やコンピューターでできる仕事は、わざわざ人間が行わなくても構わないということなのでしょう。

AI（人工知能）の性能は、どんどん進化していて、ゲームの世界ではチェスでも将棋でも囲碁でも、すでにAIが人間の世界チャンピオンに勝利しているそうですが、今では AI が司法試験にも、医師試験にも合格しつつあるのだそうです。確かに過去の数々の判例や新しい法律を学んだら、私利私欲や私情に左右されない公正な裁判ができるかもしれませんし、様々な病状に対しても、世界中の症例や最新の研究知見をくまなく検索することで、人間の医者よりも最適な診断ができるのかもしれません。そうなったら、この先、人間の判事や医者はいなくなっていくのでしょうか。人手不足が深刻な介護福祉の分野でも、様々なロボットの開発が続けられていますので、もう数年もすれば、人間の手と同じように優しく温かく、様々な介助ができるロボットが登場するかもしれません。果たして、それでよいのでしょうか？ 仮にそうなった時、私たちがそこに何か違和感のようなものを感じるのだとすれば、それこそが「人間らしさ」というものなのではないかと思います。

「医は仁術」という言葉が古くからあるように、元来の医療とは単なる病気の診断と薬の処方ではなく、医者と患者、お互いの人格の交流を通して治癒が生じ、達成されるというものであったはずです。ですから、その働きがロボットに代替可能なのだとすれば、それは逆に言えば「ロボットでも出来る仕事、ロボットのような

仕事しか、これまでして来ていなかった」ということになります。私たちの社会では、これまでたくさんの専門的知識や技術、能力、経験があることに「価値がある」と考えられて来ましたが、それらはやがてロボットにとって代わられていくでしょう。それでもなお「価値がある」として残る「人間らしさ」とは、一体どのようなものなのでしょうか。例えば、手で触れた時のぬくもりや、笑顔で交わされる声かけなどでしょうか。それらは単に体と物が接触する際の表面温度や、伝達される言語情報という範囲を越えて、お互いに多くの気付きや気持ちを伝え合っているものなのではないかと思います。

そもそも私たち人間は、コンピューターや機械のように複製可能な情報や部品の集まりではありません。誰もが神様から唯一無二の存在として創られ、命を与えられて生かされています。「人間らしさ」というもの、それは命という神様から与えられている奇跡そのものに向き直ることなしには、決して見えてこないものなのではないかと思わされています。

さて、今回の聖書は、私たちの心に刻まれ、書き記されている「新しい契約」について述べられているパウロの手紙でした。「契約」という言葉を聞くと、私たちの身近なものとしては「売買契約」や「雇用契約」などを思い出すかもしれませんが、聖書の中では人と人との約束、また神様と人との約束の関係性を表す言葉として用いられています。キリスト教の多くの教会では、「ヘブライ語聖書」のことを「古い契約の書」として「旧約聖書」と呼んでいますが、それはイエス・キリスト以前の時代の神様と人との契約、とりわけシナイ山でモーセに与えられた「十戒」に代表される「律法」のことを指しています。3 節にある「石の板」や 7 節にある「石に文字で刻まれた死をもたらす務め」という表現は、「十戒」が 2 枚の石板に刻みつけられていたということに基づいています。

「契約」や「約束」という言葉の反対には、「契約違反」や「約束破り」があるわけですが、本来はお互いが守ることに合意して約束するわけですから、初めから違反時の罰則が強調されることはないはずです。古代イスラエルの民と命の神ヤハウェとの契約も、神様が自分の民として古代イスラエルの人々を心にかけ、大切にし、慈しみ、守り祝福される、という恵みへの応答として、民は神様から示され

た律法を守って生活する、というものでした。にもかかわらず、民は神様の恵みを忘れ、その律法を守らなかっただけではなく、律法を守ることの出来ない人々を、死に向かう者として裁くようになってしまっていました。

しかし、だからといってこの世界を創り、人間を創られた命の神の御心が、人々を死に追いやることであるはずがありません。律法という石板に刻まれた古い約束を越えて、イエス様によって新しい契約、新しい救いの約束が全ての人々に与えられました。それこそが「良い知らせ（福音）」であり、「新しい契約・約束」です。そしてそれは一人一人の人の胸の中、心の中に、聖霊によって書き記され、刻まれていると言われています。6 節には「文字は殺し、霊は生かします」とありますが、これは「石に文字で書かれている律法は守られない場合には死に向かうけれど、霊によって心に刻まれている福音は、人々に命を与え、人々を生かす」ということです。

聖書では、神様は人間を自分に似せて「神のかたち」に創造されたと記されています（創世記1：27）。他の被造物である動物たちにはない、人間ならではのものとして、その「神のかたち」なる「人間らしさ」とは何でしょうか。そのことについて、「理性」だとか「信仰」だとか、様々なことが考えられるかと思いますが、ロボットや人工知能が発展し続けている今日において、それは「理性」とか「知性」とかの情報や、頭で考える理屈ではなくて、むしろ私たちの「命」そのものと言えるのではないかと思います。

今は、イエス・キリストが十字架の受難への道を進まれていることに思いを馳せる「受難節」です。イエス様は神と人とを大切にされ、罪びとと見なされていた人をも含めて全ての命を大切にされたために、権力者たちによって十字架へと追いやられていきました。しかし、その命は死で終わりませんでした。また、十字架で流されたその血は無駄になったのではなく、「新しい契約の血」（ルカ　22：21）として、全ての人々に罪の赦しと解放を告げ、命を与えるものとされていきました。この受難節、私たちも改めて自分自身の命に向き直り、「人間らしさ」というものに向き直り、イエス様の言葉と振る舞い、歩みに従う者として変えられていきたいと願います。命に向き直る時、心の中に刻まれた福音に向き直る時、私たちもまた神のかたちに変えられていくのだと思います。